

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ (一一)

第九八則 洞山常切

〔示衆〕

衆に示して云く、九峰は舌を截つて石霜を追和し、曹山は頭を研つて洞嶺に辜かず。古人の三寸、慙麼に密なることを得たり。しばらく為人の手段、なんの処にかある。

〔本則〕

挙す、僧、洞山に問う。三身の中、那の身か諸数に墮せざる。(前三三、後三三。)山云く、吾れ常にここにおいて切なり。(人を気急殺す。)

〔頌〕

頤に云く、世に入らず、(物外に身を横たう。)いまだ縁に循わず。(簾を刮つて家を成す。)劫壺空処に家伝あり。(猫児、屋頭にて尿す。)白蘋、風は細やかなり秋江の暮。(清虚の冷淡。)古岸、
IIは帰る一帯の煙。(目は天涯を断つ。)

洞山さまの則は今回が二度目。ずっと以前の第一〇回に、第九四則「洞山不安」を学んで以来です。洞山良价(八〇七〜八六九)さまは何といつても中国曹洞宗の開祖、やはりずばぬけた力量をもった禅匠でした。

その禅風は深い哲理と綿密な実践に裏づけられているのが特徴ですが、なぜか有名な「麻三斤」「無寒暑」「鳥道」などの公案は『従容録』に収められていません。また、道元禅師が『正法眼蔵』の中で洞山さまの公案を中心テーマとする巻は「仏向上事」「説心説性」「無情説法」などの多くがありますが、これらも『従容録』にはみえません。あるのはわずかに四則だけ。ちよつとさみしいですね。

まず、万松和尚の「示衆」です。「九峰は舌を切られても石霜の無言に追隨し、曹山は洞山の言葉に生命をかけた。エライ人はみな口を大切にしておいて人々を感化したのだ、おわかりかな」といった意味。これにはむろん故事があります。だいたい、九峰は石霜の弟子、曹山は洞山の弟子です。そして石霜と洞山とは法系譜の上でイトコの関係。ですから、この四人はみな仏法上の親戚関係にあるわけです。

石霜も九峰も人から仏法の奥義を聞かれて何も答えな



つたし、洞山の「常切」を曹山も守り通した。こうした禅傑たちの為人接化はなんとみごとなことよと万松はほめたたえているのです。そこで「本則」は、その洞山さまの接化のありさまです。例によって意識しましょう。僧「ほんとうに活きた仏というものをみせてください」洞山「わしはな、いつも今ここが切実なんじゃよ」

ただこれだけの会話ですが、その背景も内容もたいへん深い。僧の問いの原文は「三身中那身不随諸数」です。三身とは仏のすがたのあらわれかたを、法身・報身・応身の三つで説明したのですが、真の仏身はこんな教説をこえて、まのあたりに活きた仏としていかように現われるのか、とたずねた僧も修行経験豊かだったようです。

これに対する万松のコメント「前三三、後三三」とは、元来ギッシリと建物が建ち並んでいるさまですから、つまり「まあ、なんとにぎやかなことよ」と、三身ということばをヤユしているのです。

さて、洞山さまの答えは「常切」。仏なんていうものは、自分が常にこの場で切なるときに、まのあたりに現われるのだ、それが真の仏身だという教え。石霜や九峰のように無言の教えも深いものがあり

ますが、みずからの体験にしたがつて教示した言葉は、親切この上もない教導といえます。

これを万松が「人を気急殺す」、つまり「わたしをひどく腹立たせる」というのは禅語特有の反語形式であって、洞山を讃嘆した語にくらしいほどすばらしい、といった感じなのですね。だから禅の書物はむづかしい。



現在の洞山寺全景

今回は宏智の「頌」、つまりこの本則のすばらしさを詠じた四句の詩もとあげておきました。

「切」は俗世のはからいをこえ、時空をもこえた仏祖の家風。涼風に秋草の花なびく川岸の夕、古岸を帰る舟の棹自在。

ヘタクソなわたしの意識にひきかえ、すぐれた原詩は前頁のおおりに、「切」の重みを名前に無縁だった洞山さまの境界にかけています。また万松のコメントもおもしろい。「篤を刮る」とは「情に流されない」こと。「劫壺」は、後漢の費長房が壺の中に入ると、そこには別天地があったという故事。

さて洞山さまは、仏法を学ぶ者はいつどこにあつても「切」なる時は、その人がそのまま仏なのだというのです。ですから、坐禅・読経・聴講・法要はもろろん、正しい日常生活が行われるならば、それは仏行というありがたい教えです。ですが、無条件で喜んではいけません。「切」が問題。これは「親切」「痛切」「切実」などの「切」だからです。

忘れもしない昭和五九年五月、永平寺の秦慧玉禅師さまが鴨川市永明寺で行われた千葉県宗務所主催の大授戒会の戒師としてご垂示された内容が『すわりなおせば仏の坐』。その際のしめくくりのお話しがこの「洞山常切」でした。

禅師は「切」について「切っても切れない」とこと明示され、さらに「朝から晩までどこにおっても自分のいるところに自分と対すること、ほんとうに一つになつて

つくすということ、そこがいちばん尊い仏さまだということを、わが洞山さまがおっしゃった」と、懇切にご教示されたのです。

時に禅師は九〇歳のご高齢で四大ご不調の身をまげてのご臨錫であり、翌年正月二日にはご遷化されました。ですから禅師のご垂示は、文字どおり「常切」を身をもつて示された親句そのものでした。

このありがたいご垂示を、その際の授戒を修行されたわが参禅会員の藤原公さんと小畑節朗さんのご努力と、小畑さんの尊姉美津子さまの浄財寄捨により、『すわりなおせば仏の坐』一冊として龍泉院より上梓してからはや一〇年目、いまさらながら尊い因縁と感じるばかりです。ちなみに、「龍泉院」の寺号額も、秦禅師のご揮毫であります。

洞山さまが仏行としての実践を重んじられた言葉に、「仏向上事」があります。無限の向上という教えです。道元禅師はこれを高くかかげ、「仏向上事」というは仏に至りて進みて更に仏をみるなり」「不染汚というは平常心なり、我常於此切なり」とのべて、洞山さまの仏やさとりにとらわれない生涯修行こそ真の禅者であると示されています。生涯、努力精進ですね。

遍路にご縁をいただいて

柏市 高野 千代子

私にとって遍路とは何だったのだろうか、六〇余年生きてきた私は人生の一つの節目として、ただ漠然として四国路を巡って見たかったのです。その思いが日増しにふくらんできて今年こそ白衣をまとい、鈴の音を響かせて無心になつてお遍路さん一人になるんだと自分にいい聞かせてきました。

遍路とは、勿論自分の足で歩き、お遍路さんの定宿に泊り、一ヶ寺一ヶ寺巡り歩いてこそ本当の遍路であることは充分承知しておりますが、今の私には一寸、一人旅の勇氣もないし、家族の心配をおもいますと、やっぱりためらいがあります。そして一番安全圏の旅行社の企画に乗らせてもらったにすぎません。私も人生幾山河を越え、もう下るばかりの余生が見えてきた今、フト仏との一体感をこの身体で味わいたい願ひであったのかも知れません。

あったことが、私はまずこの方達たちとの出会いに感動しました。



平成七年四月六日(第一回目)

徳島県鳴門市にある第一番札所靈山寺で遍路の身支度を整えました。遍路すること五回目とおっしゃる六〇歳を少々越えた男性の先達さんは、定年退職してから遍路中毒になりましたと、いつも笑顔をやさず、皆さんの集まり具合に気を配り、般若心経を先導して下さいます。お寺では、ご本尊の御真言と、弘法大師の光明真言を唱え、本堂から大師堂へと続き、納札をおえて、次のお寺へと、只、只、一筋の道を一団となって巡り続けるのです。とにかく、よそ見をする時間もなく、一日の行程をただ、ただ歩くのみです。途中行

きずりの私達のバスを手で止めてパンやお菓子などをご供養下さる四国路の方々の温かさ、これが同じ日本国の中でできごとかと思いを疑いたくなるような光景でした。お金が少々あつて暇の沢山ある人々のお道楽といわれれば、全くそのとおり申しわけありませんとただ頭を下げるのみですが、遍路には巡ってみなくてはわからない深淵があるのです。その深い深い淵をのぞき見たとき、これは仏さ

死線をさまよつて(天)

船橋市 政安 裕良

散るさくら 残るさくらも
散るさくら (雲井龍雄)

私はいつ頃から死というものを意識しだしたのだろうか。幼くして枕を並べて共に病床にあつた妹の死亡、兄の戦病死、父母の死、そして職業的には炭鉱の労務責任者として死亡災害に携わる事数知れず、死は直ぐそこ迄来ていた。しかし何といつても、二〇歳での海軍予備学生への応募の時の死に直面した心境は忘れられない。でもそれらは今思ひ出すとやはり死一般の観念でしか無かつたのではなからうか。

しかし平成六年の七月に自分自

まからいただいたはからいではないかと思えてきました。

その昔から、この遍路道をどんなに大勢のお遍路さん達が巡つていったことでしょう。巡り終えず途中で行路病死された方達、乞食の如く、ただ人々の情けの供養にすがつて、それでも巡らずにはいられないこの道をどんなに多くの人々が巡つていったことでしょう。そんな遍路物語をそつと包みこんでいる四国路でした。

身が総胆管癌に罹り、膝頭十二指腸切除術(昭和天皇が手術されるかどうかという事で問題になった手術と同じで、また安倍晋太郎氏もこの病氣だったと聞いている)という生死を境にした大手術を受ける羽目になつてしまった時、嫌が応でも死というものを目の前の必然的なものとして、深く考えざるをえない仕儀となつてしまった。今から思ひおこすと二五〇六歳頃から、胆嚢の付近が時々痛み、大塚の癌研究所その他で、胆嚢の造影剤や生卵の黄身を飲んでレントゲン検査を受けた結果、胆嚢が肥大して動きが悪く、砂が溜まっ



成道会風景

ていると言われたこともあり、胆汁排出促進剤等を服用していたし、三五、六歳頃には、十二指腸潰瘍や胃潰瘍を患い、体重も五三、四kg程度に減じ薬から離れることなく、その後回復してからは体重も一時約七五、六kgとなり、それをよいことにして仕事に託つけて毎日の様に酒に浸り、時々痛んでは医者通いを繰り返していたことが思い出されるが、癌は何も昨日今日出来たものではなく、この長年の不摂生の累積の結果としてできたものであることを、今回発病してみて初めて思い知らされたのである。

若き身の 丈夫たのみの 不養生
 やがて老後の 後悔となる
 少々は苦しからじの 不養生
 つもりつもりて 後悔をする
 (安元法印、鎌田茂雄氏著、体と心の調節法 天台小止観物語より引用)

慢性胃炎のためではないかという事で、その方面の新薬を頂いて服用していたが一向に回復せず、六月の末になって、尿検査の総ビリルビンの数値が異常に高くなり、驚いた医師が更に血液検査を実施したところ、肝機能検査は全て異常に高い数値を示し、至急腹部エコーとCTを実施する事となり検査の結果、胆管が閉鎖されて黄疸になっており、至急胆汁を取り出す手術をする必要があるということとで、直ちに入院させられた。

主治医の説明では、開腹してみなければ確実なこととは言えないが、恐らく七〇八割方癌による閉塞のため胆汁がつまり黄疸を併発しているものと思われる。

その打開策としては、先ず胸から肝臓にカテーテルを通して胆汁を抜き(経皮経肝胆嚢ドレナージ)、黄疸がある程度治まった所で開腹手術を行う。

手術は胆嚢、胆管、十二指腸の全摘出、脾臓は半分位、その状況によつてはこれも全摘出し、併せて胃の三分の二程度の切除をせざるをえないというものであった。

当初医師の私に対する説明は、モット簡単に余り核心にふれずにやる予定だったらしいが、私と家内との間では、日頃から万一癌の

発病の場合でも、お互いに隠してせずに説明することということとで、数年前から夫婦で日本尊厳死協会にも加入し、死についての話し合いが行われていたので、その事を家内が医師に伝えたと、そのそれではお話ししましょうということになって、手術の全貌がインホームドされることになった模様である。

この説明を聞いた後、癌に関する図書を何冊か購入してきてもらってベッドの上で調べたところ、この病気は生死に関わる大手術であり、書籍の記事では先ず助から

洗心の〔第一三回〕 成道会円成す

昨年一二月三日、三〇名の会員参加のもとに成道会が盛大裡に厳修されました。

今回も導師は椎名老師、その他副堂・先導・侍者・侍香等を会員諸氏が勤められました。

報恩の坐禅、成道会、そして椎名老師の法話、点心、反省会の順に肅々と進行されました。

椎名老師の法話は、毎年一貫して、心に染み入る誠に感動的な成道会の本来的意義をご提唱くださいます。以下ご提唱要旨。

一二月八日は、お釈迦様が悟ら

ない確率の方が大きい様に理解された。それから次から次に実施される大体絶食による事前の精密検査に耐えながら、万一の場合の心の準備を行い、同室者の寝ている静かな病室でカーテンを引いて坐禅をしながら、心の中で観音経を唱え考えを纏めていった。

幸いに手術の前迄に身辺整理もある程度でき、遺書も一応書き上げて心の準備もでき上がった。手術の当日は午前一〇時にストレッチャーに乗って、家族に送られて手術室に入って行く時はかなり平静な心境であった。(続く)

れた日であり、仏経が始まった日でもある。成道会は、悟りとは何かに思いを馳せるとき。

今年(昨年)は、波乱・動乱の年。かつて国民がこれほど宗教問題を考えたのは、何一〇年ぶりかのことであろう。

悟りとは、愚かな繰り返しからの解放。そのためには自我、煩惱が見えなければならぬ。自我、煩惱に対する批判の精神がないと正しい仏教は身につかない。現実には一日一日を大切に生きることである。

釈尊は人生は苦であり、人間はそれから逃げられない。苦を背負って生きていくことの自覚そのものが悟りと説かれた。



成道会記念撮影

|| 知足能忍の人 ||

神戸正翁を偲ぶ

松戸市 小畑 節朗

平成七年秋も深まった十一月、神戸正さんが亡くなられたことをお聞きしました。

お亡くなりになったのは、七月一二日ということで、既に四ヶ月も経っていて、例の如く当参禅会の「入会自由、退会自由」という主

この世で一番愛しいものは自己である。だからこそ人を傷つけてはいけない。これが慈悲の原点。自我をコントロールしたところから慈悲の心が出てくる。

自我をコントロールすることが、仏教を学ぶ者にとって最も大切。修行が自我を克服する力をつけてくれる。

坐禅がその基本である。しかしタメ坐禅はだめ。坐禅に何かの目的を求めているといけない。

書物を読むのも勉強ではあるが、行をした方がよい。「百聞は一行にしかず」である。

最後に、鎌田先生の言「死ぬまで修行、死んでも修行」を引用され、一生懸命坐禅をしましょうと結ばれました。

旨でお知らせの無い気安さから、大変失礼をしていた次第でした。早速柏市桜台のお宅に伺って焼香して、仏前に往時を偲びつつ合掌したのでした。

神戸翁は、新潟県高田のご出身で、長く東北電力にお勤めになり、

定年後柏市にお住まいになり、その間名利長全寺の役員を勤めるなど種々で活躍されておられました。

龍泉院参禅会には七〇歳を過ぎても熱心にお出になっておられ桜台から自転車でお見えになっておられたこともあって、ご子息の康之さんが心配されて車で送って来られ、ご一緒に坐禅をされるということもしばしばありました。

翁との出会いで、一番思い出深いのは昭和五九年五月、鴨川の永明寺で永平寺秦慧玉禅師ご親修の授戒会の会場で五日間種々お話を承ったことです。長身瘦躯で一つ一つ綿密に語られる温顔を今も想い出されます。秀岳良正居士の法名はその戒会の安名であると奥様が話されておりました。

また、平成元年一〇月『明珠』一〇号には「知足常楽」一わが人生を顧みて思うこと、の一文を寄せられ、兵役で広島島の原爆を紙一重で難を逃れたこと、戦中戦後にお子様を亡くされたことを語られ、「平和憲法によって戦争を

お寺と山と三歳の私

幼いころより、私はひとり遊びの好きな子だった。海辺の寒村に

放棄した我が国では、過去におけるが如き封建的な、しがらみによってその運命を左右されることが無くなったことは、幸せといわざるを得ない。しかし戦争の無い人生が必ずしも幸せではない。人生には必ず老病死の運命がつきまといっている。仏法僧の三宝に帰依して心の不安を求めたいことに変わりはない。」といわれて、「知足常楽、能忍自安」を座右の銘として日々精進されていることを示されています。

たった二日の入院で眠るが如く逝かれた今、神戸翁を想うや切であります。

翁、行年八九歳

法名 威徳院秀岳良正居士

茲に、諸仏の洪名を誦して報土を莊嚴するものであります。合掌



神戸正様の
ご冥福を
お祈りいたします

柏市 武田 博志

生まれ同じ年頃の子供がいなかった。自然とそうだった。

陽射しの明るい日は、庭先の防波堤に座り、鶏卵を立てたり並べること熱中した。よく割らずに何時間も遊んでいるものだ、叔父はしきりに感心して年齢の近い私に温かい眼差しを向ける。



当時、三歳の私はもつと好きな遊びがあった。新品の赤い三輪車で坂の上の灯台まで、ひとり出掛けることだった。自動車など滅多に通らない砂利の坂道を、ふうふう息をきらせて登り、白い灯台の縁石に腰かけて一日中海を眺めて過ごした。飽きたら、灯台に続く小道に三輪車を置き、林を抜け、石段を駆け上って、観音様を祀った寺の境内で遊んだ。

今なら小さな子がひとり家から遠く離れて危ない、と心配するが、途中会う人々は誰もが私を知っていて優しく声を掛けてくれた。波の音と潮風、太陽から降り注ぐ光の中で、誰かに見守られるように

過ごした黄金の原風景だ。

長じて都市生活に入り、社会の枠組に取り込まれていくと、豊かで光りに包まれた日々をいつしか忘れ去った。

世間の荒波とはよくいったもので、呆れるほど次から次へと、問題が押し寄せる。受験や就職、組織や政治と、それはまるで轟音を伴って個人など飲みこんでしまう圧倒的な力を想わせた。もう穏やかな海から届く心地よい波音を思い起こすこともなかった。

ところが、縁あって坐禅の手ほどきを受けるために、ご本尊のいる本堂に上ったとき、何故か懐かしさを感じた。しかしその時はその訳を突きとめずにいた。

正法眼蔵はたくさんのお故事来歴を引用している。その中でよくある禅僧は人生の疑問と真剣に向きあっている。ご提唱をとおして以前は突飛にしか思えなかった禅問答に深い洞察力のあることを知った。そして日ごろ取り上げない重いテーマを、僧に代って私に尋ねられたら一体どう応えるか考えた。坐禅はひとりひとりの個人の行である。当然まっすぐ自分に向きあう場となる。

坐禅や話を通して自己との対話は時に飛躍して自分の体験に帰っ

ていく。そして寺にいて覚える懐かしさや居心地のよさは、私の幼児体験と類似していると思うに至ったわけだ。

愛用の三輪車は今、自動車に代わって代わった。速い足を得たように気ままに駆って見知らぬ土地へ出掛けていく。林道の脇に駐めて見晴らしのいい山の頂きを目指して歩く。日程を調整し、交通ルールを守り、準備や時間配分に気を配ることがなければ、まるで幼い頃の私と変わらない。

山頂では、幾重にも重なる山なみをみながら茶をすすり、ゆつくり時を過ごす。溪谷を辿って山裾に目をやると、畑や民家がその先に連なっていく。そこには人の営みがあり、複雑な人間関係や社会の約束事が渦巻いている。

苛立ちや焦りで頭の切りかえがうまくいかない時、私は迷わず自然の中に飛び込んでいく。その場をいったん離れることで意識の方向をかえ、自分を客観視できるからだ。

山野に分け入ると、そこかしこに自然の摂理に適った姿に出会う。高度や方角、土壌に植物は敏感で、そこには無理も無駄もない。与えられた場所に目を出し育っていく植物は、文句をいわず精一杯生き

ている。その姿に励まされ元気を取り戻して帰るのだ。

大人になって情報を得る手立てや処世術は身につけたかもしれない。しかし、あふれる金や物にふりまわされず、無心になって身近なものに意識を向けることは忘れがちなことになる。

一切衆生悉有仏性。欲のない心でしっかりものを見る目を持てば、人を含めた万物が同じ時を生きている秩序を感じとれるはず。

私は自然に触れて、あれほど固執してきた自分のこの世にある存在理由を捜すことを辞めてしまった。何故なら、どうして生まれてきたか、どう生きていくか、と山に生えているどんな草も樹も考えて生きていないから。

寺で教わる理と自然が教えてくれる理、そして何も欲張らずにいられた自分の過去の姿は、本来の自分の在り方だと思ふ。その場所には幸いにも日常生活と背中合わせにある。目の前のことで手一杯になつて居る時こそ、意識を引つ込め背中集中すれば、背後にいる仏様の力によって安らぎを持てるようになると信じている。

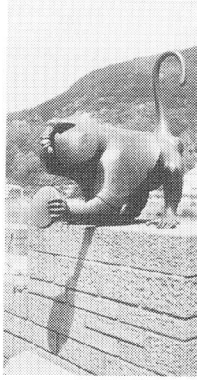
お寺と山と幼い私の姿は、本来の自己に帰る忘れてならない三つのキーワードである。

鏡を持った猿公

千葉市 寺田 哲朗

昨年の七月、ドイツの南部を旅行しました。ハイデルベルグの観光名所の一つ、市内を貫流するネッカー川に掛かる総レンガ造りの「古橋」は新旧の両市街を結ぶ一番古くからの橋とのこと。

その南詰袂に大きな三才児位のブロンズ製の猿公の像が据えられています。ガイドによれば、ハイデルベルグを訪れる旅人を歓迎する猿として親しまれていた古くからの像を最近この作品に代えたこととす。



猿公やブロンズの鏡を手に持ち、通行人に「それ、ご覧」と突き出す格好をしています。それに、この猿公の頭が中空になっており、丁度下側から観光客が頭を入れると、猿公になった視野で街を行く人々を眺められる造りになっていました。観光客は面白がつて猿面を被った格好で記念撮影をしたりしていました。

ここでわが龍泉院の「古鏡」の御提唱に先立ち、お寺に伝わる昔の古鏡を見せていただいた事が思い出されたのでした。帰ってから丁度欠席で伺えなかった「古鏡」の部分を含めときますと、雪峰山の真覚大師と三聖院の慧然禪師とが歩いているとき、一群の猿どもを見た。そこで雪峰がい

った。「あの猿どもは、それぞれ一面の古鏡を背負っている」(下略)。一寸の偶然。もしかすると、中国か日本の古典がドイツの古都に伝わったのかと想像したりして、この箇所のご提唱に欠席したことを大変惜しく思いました。(文中の引用は増谷文雄先生の訳を借用しました)

《龍泉院参禅会二五周年記念行事》

中国五山を巡る旅出発に際して

柏市 五十嵐 嗣郎

光陰矢の如しと申しますが、ついこの前二〇周年の記念行事が催されたと思っていたのに、もう今年は二五周年を迎えることになりました。この五年間いったいどれほど坐り込んだのか、充実した意義ある日々をどれほど過ごしたのかと思うと、内心じくじたるものがあります。毎月参禅会でご老師からのご提唱をお聞きして、明日からやり直そうと思いつつも何も手付かずにはまた参禅会を迎える五年間でした。

その様な私達を見抜いてか、ご老師は二五周年を節目として、もう一度坐禅の原点に戻って基本をしつかり身に付けるように、坐禅

儀のご提唱がこの一月から始まりました。この巻は短くて一見簡単そうに見えながら、教えの内容は非常に奥深く、汲めども尽きぬ味わい深い巻であります。この時期に最もふさわしい巻をご提唱いただいたと大変ありがたく思っております。

さて、今回二五周年記念行事の一つとして、このゴールデンウィークを利用して、中国五山を巡る旅へご老師を始め総勢二二名でまいることになりました。

道元禪師様が正伝の仏法を求めて如浄禪師様のもとで修行された天童寺を始め、五山第一の径山、如浄禪師の墓塔のある浄慈寺、霊

隠寺と典座教訓の老典座でおなじみの阿育王寺などを歴訪する予定です。道元禪師が如浄禪師に初めてお会いになられたのは七十七年前の宝慶元年五月一日ですが、偶然我々一向も天童寺には五月一日に訪れる予定になっております。また天童寺では朝課に参加し参禅ができるようお願いしていますが、道元禪師様が身心脱落された同じ地に坐る事により、坐禅の原点を少しでも見つめる事ができればと思っています。

今回の旅では、会員間の交流を深めるために禅などを語り合う時間や、ご老師に日頃なかなかお聞きできない事を伺う機会を多く取れるよう配慮されています。また、道元禪師様が寧波の船の中や阿育王寺で老典座から禅のいろはを受けられたように、寧波のバスの中やホテルなどでご老師からご提唱をお聞きする事ができれば、非常に意義深い旅になるのではないかと期待しています。

道元禪師様が正伝の仏法を求めて遍歴された道を歩みながら、若き日の禪師に出会うことができれば、我々に坐禅の喜びを伝えてくださったことに感謝を申し上げたいと思っています。

それでは行つてまいります。

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止静 鐘 二声 坐禅

経行 鐘 二声 経行

放禅 鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く

講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師

平成八年度四月より「谿声山色」の巻を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年齢、性別を問わずなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月八日）

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（ ）中は座談の司会者。

平成七年

・一〇月二二日 二一名
（安本小太郎氏）

・十一月二五日 二八名
（大坂 昌宏氏）

・第一三回成道会
十二月三日 三〇名

導 師 椎名宏雄老師

総 幹 事 小畑 節朗氏

成道会幹事 五十嵐嗣郎氏

写真撮影 井之輪 進氏

・二月二四日 二四名
（武田 博志氏）

・一月二七日 二五名
（寺田 健二氏）

・新年会
二月一二日 二〇名
於・柏駅前芳野屋

・二月二五日 二八名
（添田 昌弘氏）

・三月二四日 三一名
（宮本 茂氏）

▼今年は、龍泉院参禅会誕生二五周年。会員の発心により、記念二大行事実施決定。

▼その一。中国仏教史蹟参拝団ツアー（四月二七日～五月四日）実施。二二名の参加申込み。

団長・椎名老師、副団長・添田氏、写真・中寫氏、記録・杉浦氏、秘書長の五十嵐氏には、プラン段階から大変なお骨折りをいただきました。感謝いたします。

▼その二。「禅を聞く会」開催。

十一月四日。柏市内の会場予定。講師として、奈良康明先生、大乘寺（金沢市）の板橋興宗老師のご来駕決定。当参禅会員冥利。

▼成道会では、小畑幹事様が進行マニュアルを作成くださり、会員配役拜命以来最高の円滑進行。

▼一二月の月例参禅会後、会員による恒例の年末作務奉仕実施。

▼北岡やす江様より、豊岡市からご喜捨と丁寧なお手紙をいただきました（一月）。お元氣の様子。今後もお健やかに。

▼二月の恒例新年会では、参加者全員が今年の抱負等思いのたけを語り、感動の渦が会場一杯に満ち溢れ、更なる精進を誓う。

▼平成八年度の年番幹事に、沢村国勝氏と小沼亮氏が就任。今年一年よろしく願います。

▼昨年度幹事の大役を見事に果たされた五十嵐嗣郎氏と井之輪進氏に深く感謝。（杉風記）

●発行／天徳山 龍泉院 千葉県沼南町泉81 千葉県沼南町泉81
●印刷／岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45 0471(91)1609
0471(43)3131